

高校体育授業において、学習指導形態が 生徒の運動有能感に及ぼす影響

— 「できる」を実感させる授業実践 —

J 1 9 9 3 3 9

東 佑 至

古和 悟 教授

1. 緒 言

1.1 高等学校の体育授業に求められていること

文部科学省(2018)は、学習指導要領で保健体育科の目標を「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続する資質・能力を育成すること(一部抜粋)」と設定している。そのため、高等学校卒業後も運動やスポーツを親しむことができるように、身体を動かすことの楽しさやおもしろさを授業内で伝える必要があるだろう。岡澤(2003)は、「運動を継続する上で、運動することが楽しいから運動に参加するというように内発的動機づけに基づいて参加することが重要である」と述べている。また、「内発的動機づけは運動有能感の高まりによって強められる」と報告されている(杉原, 1995、岡澤, 1996)。これらのことより、生徒の運動有能感を高めることが、高等学校の体育授業に求められるだろう。

1.2 運動有能感

岡澤(1996)は、運動有能感を「運動場面における自信」と定義している。運動有能感は、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子で構成されている。

表1. 運動有能感を構成する因子

因子名	特 徴
身体的有能さの認知	自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知に関する因子 自分は、運動ができるという自信
統 制 感	自己の努力や練習によって、運動をどの程度コントロールできるかという認知に関する因子 努力や練習をすればできるようになるという自信
受 容 感	教師や仲間から受け入れられているという認知に関する因子 運動場面で、教師や仲間から受け入れられているという自信

1.3 体育授業における学習指導形態

学習指導形態とは、「学習活動や学習指導の組織的・方法的側面を表すもの」として定義されている(友添, 2002、菊, 2006)。大友ほか(1991)は、「技能水準の高い生徒は、練習とゲームのいずれの場面においても積極的に運動に従事しているが、技能水準の低い生徒は、練習とゲームのいずれの場面においても消極的な運動従事の傾向がみられる」と報告している。そこで、出原(2004)は「子どもたちが異質の小集団の中で、自分とは違った出来映えや分かり具合を持った異なる友達と関わり、集団としての力を学びのために発揮しながら学習を進めていく」という学習指導形態を支持している。

1.4 本教育実践研究の目的

本教育実践研究の目的は、生徒に「できる」を実感させる授業実践において、学習指導形態が運動有能感に及ぼす影響を検討することである。

2. 方法

調査は、2020年9月1日から2020年12月8日の期間に、筆者が担当した2講座のバドミントン授業内で行った。全10回の授業で構成した単元で3回(前-中-後)にわたって、岡澤(1996)によって作成された「運動有能感測定尺度」を用いて質問紙調査を行った。また、データの処理は、統計ソフトのEZR(Easy R) version1.54を用いて、反復測定分散分析を行った。

3. 結果

学習指導形態が運動有能感に及ぼす影響について検討を加えるため、第1回目の調査結果に基づいて、運動有能感合計得点を上位・下位群の2群に分けて反復測定分散分析を行った(図1)。単元を通して各群に多少の変化が見られた。また、単元中に行ったスキルテストの結果に基づいて、スキルテストの得点を上位・下位群の2群にわけて反復測定分散分析を行った(図2)。その結果、運動有能感合計得点と「身体的有能さの認知」において、群の主効果が0.1%水準で有意であった。さらに、「統制感」「受容感」において、群の主効果が5%水準で有意であった。

	群	N	単元前		単元中		単元後	
			MEAN	(SD)	MEAN	(SD)	MEAN	(SD)
運動有能感合計	全体	73	37.11	(8.63)	36.22	(9.51)	37.33	(9.30)
	上位群	37	43.84	(5.08)	42.95	(6.51)	43.81	(6.84)
	下位群	36	30.19	(5.49)	29.31	(6.75)	30.67	(6.29)
身体的有能さの認知	全体	73	8.85	(3.58)	8.84	(3.82)	9.05	(3.97)
	上位群	37	11.27	(3.01)	11.11	(3.17)	11.38	(3.40)
	下位群	36	6.36	(2.11)	6.50	(2.91)	6.67	(2.98)
統制感	全体	73	13.95	(3.47)	13.36	(4.12)	13.88	(4.02)
	上位群	37	16.08	(1.92)	15.76	(2.96)	16.11	(3.06)
	下位群	36	11.75	(3.34)	10.89	(3.66)	11.58	(3.57)
受容感	全体	73	14.32	(3.28)	14.03	(3.33)	14.40	(3.54)
	上位群	37	16.49	(1.73)	16.08	(2.66)	16.32	(2.85)
	下位群	36	12.08	(2.99)	11.92	(2.53)	12.42	(3.05)

図1. 運動有能感の推移(運動有能感合計得点による群分け)

	群	N	単元前		単元中		単元後	
			MEAN	(SD)	MEAN	(SD)	MEAN	(SD)
運動有能感合計	全体	73	37.11	(8.63)	36.22	(9.51)	37.33	(9.30)
	上位群	36	40.22	(8.30)	40.11	(8.69)	40.97	(8.68)
	下位群	37	34.08	(7.83)	32.43	(8.72)	33.78	(8.46)
身体的有能さの認知	全体	73	8.85	(3.58)	8.84	(3.82)	9.05	(3.97)
	上位群	36	10.44	(3.59)	10.56	(3.88)	10.64	(3.84)
	下位群	37	7.30	(2.80)	7.16	(2.90)	7.51	(3.46)
統制感	全体	73	13.95	(3.47)	13.36	(4.12)	13.88	(4.02)
	上位群	36	14.56	(3.30)	14.58	(3.22)	15.00	(3.33)
	下位群	37	13.35	(3.54)	12.16	(4.54)	12.78	(4.32)
受容感	全体	73	14.32	(3.28)	14.03	(3.33)	14.40	(3.54)
	上位群	36	15.22	(3.04)	14.97	(3.27)	15.33	(3.26)
	下位群	37	13.43	(3.28)	13.11	(3.13)	13.49	(3.56)

図2. 運動有能感の推移(スキルテストの得点による群分け)

4. 考察

単元を通して、「できる」を実感させる授業実践を心掛けたため、「身体的有能さの認知」の低下は見られなかった。しかし、双方の群分けで下位群の「統制感」が、単元-前から単元-中にかけて低下する傾向が見られた。学習指導形態や時間の経過が短かったことも影響を及ぼし、チームで学習したことや工夫したことが、成果に繋がらなかったため低下したと考えられる。また、単元-中から単元-後にかけて、運動有能感上位群の運動有能感合計得点以外は、すべてにおいて向上が見られた。出原(2004)は「経験者は初心者・下手な人もうまくすることによって、自分のうまさが引き出される」と述べ、異質協同の形態を提唱している。単元-中以降、スキルテストの結果に基づいて、異質協同の班を形成したことで、バドミントン技能上位群が下位群を生かしながら活動できていたことが示唆される。